

【講座採録】

西国と『源氏物語』―玉鬘巻―

後藤祥子

頂いたテーマが「西国と源氏物語」ということですが、当時の考え方でいうと、西国とは五畿内以西から西方、播磨（今の兵庫県西部）から中国地方を挟んで九州までを指します。『源氏物語』に関する名所案内はいろいろ出ておりますが、小山利彦氏の『源氏物語と風土―その文学世界に遊ぶ―』（武蔵野書院）がとても充実しています。それから作家の書いたもので面白いのが、瀬戸内寂聴氏の『歩く源氏物語』（講談社）です。しかし何といっても源氏物語の舞台は京都が中心なのでですね。ですから今回は問題をふくらませる為に、和歌関係の資料を少し援用してみます。片桐洋一氏編『歌枕を学ぶ人のために』（世界思想社）には、中国・四国地方、九州地方の歌枕も項目を設けてありまして、大変参考になります。その中に『源氏物語』も出て参ります。

『源氏物語』というのは、実は決して、道行（みちゆき）的に地名が羅列されるというものではないのですね。そのような意味では非常に禁欲的で、ごく最小限の歌枕、あるいは地名しか触れていません。ですからむしろ、たくさん地名・歌枕の中から、『源氏物語』が何と何を選んだか、という観点でみていくのがいいのではないのでしょうか。

『源氏物語』のなかで、長距離にわたって西に旅した人というところを知り、玉鬘さんかないんですね。『源氏物語』の「夕顔」という比較的早い巻に、源氏に大変愛された魅力的な女性が出て参ります。

と、十日で都に伝わっている。ですが、先にも申しましたように、玉鬘たちは女子供連れなので、二週間から二十日くらいかけて船で下つていったのだらうと思われます。

さて、この船旅の様子ですが、玉鬘巻には「おもしろき所どころを見つつ、『心若うおはせしものを、かかる道をも見せたてまつるものにもがな』」と記されています。乳母と、夕顔の乳母子であった娘たちが、瀬戸内海の白砂青松を眺めつつ、「都を一步も出たことのないあの姫（夕顔）に、こんな旅行もおさせしてあげたかった」と話しながら下つていくのです。ここで初めて歌枕らしきものが出てきます。

舟人もたれを恋ふとか大島のうらかなしげに声の聞こゆる
実は、筑紫へ下る旅の途中でとりあげられた歌枕はこの「大島」だけなのです。能因法師の撰んだ『名所歌枕』には、「大嶋」は周防国の歌枕として挙げられています。ここで、ひめまつのお編『平安和歌歌枕地名索引』（大学堂書店）を参照してみますと、「おほしま」を詠み込んだ歌が収められているものとして『後撰集』『藤六集』『一条撰政集』『高遠集』『和泉式部集』、「おほしまのなだ」では『惠慶集』、「おほしまのなると」では『後撰集』『一条撰政集』、「おほしまのなるとのうら」では『元真集』が挙げられています。歌枕にも流行り廃りがあり、後代に大変よく詠まれながら平安時代には全く詠まれないものもあります。大島に限っては当時、とくに『源氏物語』以前に頻繁によく詠まれているのがわかります。この大島を、『源氏物語』の作者が、一行の道中に目立つ島として取り上げたのは、歌枕「大島」の不動の位置を象徴したものです。

ある仲秋の名月の晩に、某の院という大変不気味な場所に連れていかれて、物の怪にとり殺されてしまった、その夕顔の忘れ形見が、頭中将との間に生まれた玉鬘です。

この娘に、父親の頭中将は無責任にも乳母をつけていない。こういうことはよくあることで、とくに継子物語では、幼い姫は、彼女自身の乳母ではなく、母親の乳母に育てられることが多いですね。母親自身は娘時代じつかりした乳母をつけられて、ちやほやされていた。けれども生家が没落した上に夫との仲が思わしくなく、生まれた娘には乳母をつけてもらえない。そうしたときに、母親の乳母が、経済力としてつかりした心魂をもって娘の面倒もみる。これが継子物語の場合、生母の零落を象徴するのです。玉鬘もこの例にもれず、母親夕顔の乳母に庇護されます。

その乳母の夫が、太宰の少式になったものですから、奥さんの孫にあたるような玉鬘と一族郎党を引き連れて、船で筑紫へと下つていきます。当時このような家族連れで九州に行くには、『狭衣物語』などをみても、山崎の津から船を仕立てて、瀬戸内海を通って関門海峡を過ぎ、北九州の博多の港へ入っていくのが普通でした。ただ、急ぎの場合は馬の方が速いらしくて、『延喜式』という十世紀前後の儀式書によりますと、「太宰府上廿七日、下十四日」（二四・主計上）とあります。十二世紀初めに源経信という太宰府の長官が亡くなったときは、『中右記』に「永長二年閏正月六日薨、廿七日聞及、」とありまして、お葬式を伝える使いが大体二十日くらいで上京できたようです。『小右記』をみると、「寛仁三年四日七日、刀伊賊、筑前国怡土郡を襲う」という事件を、筆者の藤原実資が四月十七日に記しております。これくらいの天下の一大事となる

金の岬過ぎて、「我は忘れず」など、世ともの言ぐさになりて、かしこに到り着きては、まいて遥かなるほどを思ひやりて恋ひ泣きて、この君をかしづきものにて明かし暮らす。

先にも参照しました『名所歌枕』には、「金御崎」が筑前国の歌枕として挙げられています。筑前国には大変歌枕が多いのです。ただ通過するところよりは、都人にとって縁の深い、地方都市としては当時最も大きく栄えた太宰府周辺の地名が、歌枕として多く詠みこなされたわけです。

ところが、「かねのみさき」を実際に詠み込んだ当時の歌として残っているのは『散木奇歌集』の一首のみです。

音にきくかねのみさきはつきもせずなく声ひびくわたりなりけり

この『散木奇歌集』というのは、先程触れました源経信の子の一人、源俊頼の家集です。その中の一巻は悲嘆部となっていて、父の遺骨を携えて九州から上京するときの哀傷紀行文集となっています。他の歌人が詠み込まないような地名を貪婪に詠み込んでいるのが、平安時代には大変珍しいものです。この『散木奇歌集』に詠まれた歌枕と、『源氏物語』玉鬘巻に出てくる西国の歌枕とを対照させてみた表を後に掲げておきましたのでご覧下さい。そうして驚いたことには、俊頼の旅日記に出てくる地名と『源氏』「玉鬘」の旅とで重なっているのはこの「金御崎」だけなのです。

さて、先程引用した玉鬘巻の本文に「我は忘れず」とありましたが、これは『万葉集』に出てくる金の岬を詠んだ歌の一節です。

千早振かねの岬を過れども我は忘れずしかのすめ神（万葉集巻七・一二三四「雑歌羈旅にして作る歌九十首」）

この歌は平安時代にどのような形で語られていたのか、いまだに見当が付きません。というのも、『万葉集』の中で平安時代にも愛唱し続けられた歌の多くは、平安中期の『古今和歌六帖』という歌集によって、たいてい平安風に詠みかえられているのです。その『古今六帖』にこの歌はないのです。紫式部が勉強家で、他の人が読むことの出来ない『万葉集』を読んだ結果、ここでも学が出たのだと思いたいところですが、この部分の書き方をみると作者の知ったかぶりということではないのです。夕顔の乳母や乳母子たちが舟で下って行くときに、ふと思ひ出すという文脈で、「世間一般でよく口癖のように言っている」と前置きしていますから、人口に膾炙した歌だったのではないのでしょうか。万葉の歌で平安時代に人口に膾炙したものは、『古今六帖』や、平安風に再編纂された『人麿集』『赤人集』『家持集』などだけによって味わわれていたかというところ、どうもそうでもないらしい。現在は失われた『万葉集』の平安風アンソロジーがありそうなのですね。『和泉式部集』や『四条宮下野集』にも万葉集の貸借の話が出て来て、『万葉集』そのものではなく、アレنجされたものが人々の間を行き来しており、この「我は忘れず」などもそのようにして紹介され愛唱されていたのかとも思われます。あるいは謡いものであったかも知れません。

さて一行は太宰府に着き、当座は羽振りよく暮らしたと思われるのですが、やがて少弐が亡くなったときには、勢いよく都に帰っていく力をなくしてしまっていました。とうとう乳母と玉鬘たちは、長女の嫁ぎ先の肥前に移り住んで、ようよう生活を営んでいきます。玉鬘が田舎には勿体ないくらい的美貌に育つてくると、しきりに玉鬘に求婚する男たちが現れます。その中に、肥後国の大夫監という男

がおりまして、これがとうとう肥前までやってきます。乳母たちは、玉鬘をこんな田舎人と結婚させるのは畏れ多い、少弐の遺言もあり、無理をしても都に姫を連れ帰ってさしあげたいと決心するのですが、それも知らずに、大夫監はたびたびやって来ては乳母に歌を詠みかけます。

君にもしころたがはば松浦なるかがみの神をかけて誓はむ
「せっかく結婚しても男はしばらくすると飽きて女を不幸な目に会わせるものだけれど、私だけは絶対にそういう不誠実はない。生涯あなたを大事にするつもりでいるけれども、もし私にそういう不屈きところがあるとしたならば、この国に鎮座します松浦の鏡の神が罰をお与えになるにちがいない。私はそれにかけてもいい」という歌です。しかも、にやつとして「なかなかうまくできたでしょう。私も最高の出来だと思ふんですがね」などという様子は、都人からしてみればいかにも幼稚臭く社交慣れがしていません。そういうむくつけき男に歌など詠まれ、返事をするのも人心地がしませんが、機嫌を害してはならないとばかりに祖母のふりをした乳母が歌を返します。それが失礼なのですね。

年を経ていのる心のたがひなばかがみの神をつらしとや見む
「長年姫を幸せにして差し上げようとこまでお育て申してきたのに、この心願がもしまかり間違つて、姫を不幸に陥れることがあったら、私は鏡の神を冷たいとお恨み申します」、つまり、勘のいい人なら「大夫監に攫われるような不幸があつたら」と気付くきわどい内容の歌です。流石に田舎者であっても大夫監は勘が鈍くはなく、乳母に詰め寄つて来たので、慌てて「もしもあなたが姫を飽きて捨てたりでもしたら」と詠んだのだ、とわざわざ言い訳をしなくては

ならない始末でした。和歌というものは限られた字句の中に納めるものですから、ことば足らずも承知の上で、往々にしてどのようなでも解釈できる、詠む人の本音と、相手に読みとらせたいことが全く裏腹な歌があるのです。

先程も触れましたように、現実の太宰府では都人がいろいろな地名を歌に詠み込んでいたのですが、物語の方は、専ら姫の運命を辿ることが主なものですから、太宰府時代の歌枕はそっこのけです。肥前に行つて初めて「松浦」という歌枕が出てくるのです。ここでまた『平安和歌枕地名索引』を参照しますと、松浦そのものは、「まつら」「まつらがた」「まつらがは」「まつらしまやま」「まつらのうら」「まつらのおき」「まつらのしま」「まつらのはま」「まつらやま」と、多く歌に詠み込まれています。ですが、実は中世初頭までの和歌史のなかで、「松浦の鏡の神」が詠まれているのは、『紫式部集』中の贈答歌二首があるだけなのです。しかも「鏡の神」以外の、松浦に関わる歌枕を詠んでいる歌も、みな紫式部より二世紀ほど遅れたものばかりです。いかに「松浦の鏡の神」が紫式部の専売特許だったかがおわかり頂けると思います。

松浦は遣隋使、遣唐使が出航して行くときの日本の最果ての港でした。太宰府に次いで印象深い地名だったと思われるのですね。とりわけ上代には悲恋の物語が伝わっています。松浦佐夜姫というおそらく地方豪族の娘が、大伴狭手彦という遣隋使の、いわば現地妻となるのですが、狭手彦が出航したあと、彼女は恋しさのあまり来る日も来る日も松浦山の上で船が帰ってくるのを待ち続け、とうとう石になってしまったというのです。当時の歌学書には必ずこの佐夜姫の物語が出てきましたから、紫式部も知らないわけではなかつ

たでしようけれども、ここでは松浦を取り上げておきながら、佐夜姫には触れようとしていません。

佐夜姫の代わりに『源氏物語』が問題にした松浦の鏡の神とは、現在の佐賀県唐津市にある鏡神社の祭神です。そのひとりが息長足姫命（神功皇后）で、もうひとりが太宰少弐藤原広嗣。これは国家的な謀反で殺されて神になった人ですので、神といつても非常に恐ろしい怨霊神です。『尊卑分脈』に彼について注があります。

廣繼の事 太宰府より奈良京に一日にして至る云々

身に七能有り。常人に異なり。龍駒を得て京洛鎮西朝夕往反。聖武天皇御宇天平十二年十一月十五日謀叛之聞こえ有るに依りて玄昉僧正奏聞に及ぶ之間、斬首云々。又云宇合一男廣繼少將。西府に於いて謀叛を發す之時、大野東人を以て官兵と為て合戦。敗北之間、廣繼自ら以て刀頸之後、其頸空に昇るの次で多く官軍を殺す云々。此頸空中に赤鏡と成り、之を見る人悉く以て死すと云々。豊後國鏡官靈神是なり云々。又吉日大臣者廣繼之師也。通神人云々。

広嗣は藤原氏の衰えに危機感を持ち、なんとか挽回しようとした揚げ句に乱を起こしました。玄昉、吉備真備に反発をしたために太宰少弐として流されましたが、九州から旗揚げしたわけです。しかし追い詰められ、自分で刀を首に当てて切り落としたが、その首が都まで飛んで来たといひます。また首が空に向かって飛び上がった赤い鏡になり、これを見た人は悉く死んだという。こんなところにも「鏡の神」といわれる所以があるわけです。もともと松浦は、神功皇后が三韓征伐に出掛けていったときに最後の祈りを捧げた地です。古代においては鏡、剣、玉といういわゆる三種の神器は神に

祈るためのもので、神社に鏡が祭られているのは当然のことなんです。それに加えて、広嗣の首の説話があるわけですから、松浦の鏡の神はなまじな神じゃない、怨霊としての力の強い神です。そういうようなものを紫式部だけが平安時代の中で詠んでいるのはどういうことなんですか。ここで『紫式部集』をみてみましょう。

筑紫へ行く人のむすめの

6 西の海を思ひやりつつ月みれば ただになかる頃にもあるかな

返し

7 西へゆく月のたよりに玉章の 書き絶えめやは雲の通ひ路

紫式部の父親の藤原為時は十年程うだつの上がない浪人生活をしていましたが、長徳二年にようやく越前国守になり、紫式部とともに越前武生に赴任致しました。ちょうどそのとき紫式部の幼馴染み、多分従姉妹でしょうが、それが筑紫へと下ったのです。月は東から出て西に沈みますから、西の空へ流れていく月、それに従って自分も西にいくのだと思うと泣かれて仕方がない、という歌です。菅原道真も同じようなことを詠んでおります。それに対して紫式部は、「別れ別れになるけれども、あの雲が通っている限り、私たちがどうして手紙を書き絶えるなんてことがありましようか。やりとりしまししようね」と約束をする。約束の通りにこの幼友達が、肥前に下ってゆくまでに紫式部と交わしたやりとりが、『紫式部集』に収められております。

姉なりし人亡くなり、又、人の妹うしなひたるが、かたみに行きあひて、亡きが代りに、思ひかはさんといひけり。

文の上に、姉君と書き、中の君と書き通はしけるが、おの

枕の話など聞けたのではないのでしょうか。ところが実は、彼女は亡くなってしまうらしいのです。

とほきところへ行きにし人の亡くなりけるを、親はらかななど帰り来て、悲しきこと言ひたるに

8 いづかたの雲路と聞かば尋ねまし 列離れけん雁がゆくへを
玉鬘巻など書いているときに、「あの人が生きていたらもう少し九州のことを詳しく書けたのに」ということがあったかもしれない。そんなわけで、この鏡の神という和歌の素材は、まさしく紫式部と幼馴染みとの間に取り交わされた歌を題材にしているらしいのです。それで、この幼友達というのがどういう立場の人だったのかというと、『国司補任』を見ると、紫式部の父と同じ長徳二年の正月二十五日に肥前守になった、橘為義という人のことが「大間書」に載っているのが分かります。どうやらこの人の娘がこの幼馴染みだったのではないのでしょうか。

さて、その鏡の神にかけてとりあえず大夫監を退散させた乳母たちは、満足して肥後に帰った男がもう一度戻ってくる前に都に上るうと、とるものもとりあえず少人数で肥前を後にしました。

ただ松浦の宮の前の渚と、かの姉おもとの別るをなむ、かへりみせられて、悲しかりける。

浮島を漕ぎ離れても行く方や いづくとまりと知らずもあるかな

行くさきも見えぬ波路に舟出して 風にまかする身こそ浮きたれ

今までこの「浮島」というのは、山口県大島郡にあるものとして注釈を施されて来ましたが、この歌は松浦宮のある佐賀県唐津を離

がじしとほき所へ行き別るるに、よそながら別れをしみて
北へ行く雁のつばさにことづてよ 雲の上がき書き絶えずして

返しは、西の海の人なり。

「行きめぐり誰も都にかへる山 いつはたと聞くほどのほるけさ
津の国といふ所よりおこせたりける

「難波潟群れたる鳥のもろともに 立ち居るものと思はましかば
かへし

(二行空白)

筑紫に肥前といふところより、文おこせたるを、いとはる
かなるところにて見けり。その返りごとに

「あひ見むと思ふ心は松浦なる 鏡の神や空に見るらむ

返し、又の年持て来たり。

「行きめぐり逢ふを松浦の鏡には 誰をかけつつ祈るとか知る

とうとう相手は肥前に着いたのですが、そこへ紫式部は、「私がどんなにあなたを恋慕っているか、御地にある鏡の神が、その鏡に照らして下さいますでしよう」と言ってやったのです。この贈答によれば「鏡の神」をまず歌に詠み入れたのは紫式部の方ですが、その詞書に「肥前といふところより、文おこせたるを」とある所を見れば、女友達の肥前からの手紙には、珍しい現地の見聞がこまごまと書き記され、そして当然、「鏡の神」についても触れる所があったでしょう。紫式部の歌句は、女友達の手紙の文面に応えるものとなっていたのに違いありません。そしてその返事が、肥前から都を通って越前へ、やっと翌年届きました。

もしも紫式部が彼女と再会できていたら、もっともつと九州の歌

れるときの歌ですから、その近くにあったほうが都合がいいですね。それで昨日(平成八年十二月一日) たまたまテレビを見ておりましたら、長崎に浮島というのがあったそうですね。蜃気楼と同じような天然現象だそうだけれども、水平線の彼方にある島が、水との間に空間ができたように見える、島が浮いて見えるという。平安時代、和歌の世界で一番有名な浮島は、実際には海上の島ではなく、陸奥の多賀城の南方にある浮島明神の名前を指します。都人はその名前から、海に浮いている鳩の浮巢の大きいようなものを考えているようだけれども、実際にそのようなものが日本近海にあるわけがない。おそらく肥前で詠まれたこの浮島も、先のような自然現象を言い伝えたのではないかという気が致しました。

かく逃げぬるよし、おのづから言ひ出で伝へば、負けじ魂にて追ひ来なむ、と思ふに、心もまどひて、早舟といひて、さまことになむ構へたりければ、思ふ方の風さへ進みて、危きまで走り上りぬ。ひびきの灘もなだらかに過ぎぬ。「海賊の舟にやあらん、小さき舟の、飛ぶやうにて来る」など言ふものあり。海賊のひたぶるならむよりも、かの恐ろしき人の追ひ来るにや、と思ふにせむ方なし。

うきことに胸のみ騒ぐひびきにはひびきの灘もさはらざりけり

この「ひびきのなだ」は、『能因歌枕』に「播磨」とあります。そして『平安和歌歌枕地名索引』を参照すると、紫式部に先立つこと一世紀ぐらいの、三代集の時代にいろいろな人が詠んでいます。まず、紫式部の大変尊敬する伊勢の御(『伊勢集』)、その娘の中務(『中務集』)。「相如集」に同歌あり)、それから壬生忠見

（『忠見集』）。忠見は二首「ひびきのなだ」を詠んでおりまして、このあたりに縁の深い人であったと思われます。それから『海人手子良集』の藤原師氏、その甥伊尹の『一条摂政集』。平安末期の歌僧俊恵―この人は先程の俊頼のこどもですが―の『林葉集』にも見られます。

ここで問題となるのが、『万葉集』巻十七に太宰帥大伴旅人が上京する際、一行の誰かが詠んだこんな歌です。

昨日こそ舟出はせしかいさな取りひびきの灘を今日見つる
かも

（万葉集巻十七・三八一五旧三八九三）

「ひびきの灘」ではなく「ひぢきの灘」なのです。表記は「日治奇奈田」とあります。どう読んでも「ひぢき」ですね。『名所歌枕』の播磨国にこの表記で収めます。つまり播磨にあったのは「ひびきの灘」ではなく、本来「ひぢきの灘」であったのではないか、ということです。ここで、山岸徳平氏の「日本古典文学大系 源氏物語五 月報」の補注を参照致しましょう。玉鬘巻のこの部分に関する補注です。

響の灘は、現に、玄海灘の東に在るが、この本文のは、古来、播磨となつてゐるからそれに従う。然し、播磨には「ひぢきの灘」が、昔からあるに過ぎない。大伴旅人が筑紫から上京の時に、次の如く詠んだ（万葉集巻十七―山岸先生が旅人自身の歌のように書いていらつしやるのは、どうやら思い違いです―筆者注）。

昨日こそ舟出はせしかいさな取りひびきの灘を今日見つる

右臣伏見山陽西海南海三道舟舩行之程、自櫛生泊至韓泊一日行、自韓泊至魚住泊一日行、從魚住泊至大輪田一日行、自大輪田泊至河尻一日行、此皆行基菩薩計程所建立而今公家唯修造韓泊輪田泊、長麿魚住泊以下略之

三善清行という大變有能な政治家が出した『意見封事十二箇条』というもののからの抜粋なのですけれども、これによつて播磨から摂津にかけて、西から櫛生泊（現室津）、韓泊（現高砂）、魚住泊（現江井島）、大輪田泊（現和田岬）、河尻（淀川河口）という五つの港があつて、「韓泊（唐泊）から河尻（川尻）」という行程が舟歌などにもなつていたということがわかるわけなのです。

こうして玉鬘たちは無事都に帰つてきましたが、ご落胤はうつかり名乗り出るとんでもないことになるので、用心して向こうから見付けてもらえるように神頼みを致します。

「神仏こそは、さるべき方にも導き知らせてまつりたまはめ。近きほどに、八幡の宮と申すは、かしこにても参り祈り申したまひし松浦、宮崎同じ社なり。……」

つまり、石清水八幡宮にも願かけしたらいいだろうと、その本社は九州の宇佐八幡宮ですが、その別宮が松浦の鏡の神でもあり、また太宰府に近い宮崎宮でもあったということです。この宮崎は、藤原定家の『万物部類倭歌抄（五代簡要）』に、「源氏名所」としてきちんと数えられています。

…… まつらの宮 かゞみの神 うきしま ひぢきのなだ か
はじり からとまり はこぎき やはた ……

この挙げ方の順序は地図上の位置の順序、あるいは玉鬘の行程の順序ではありません。定家は全く、物語の叙述の序列に従っている

かも

「ひぢきの灘」の、聞き誤りか思い違いか、壬生忠見が伊予に行く時、由ある浮かれ女が、次の如く詠みかけた（忠見集）。

音に聞き目にはまだ見ぬ播磨なる響の灘と聞くは誠か
又、相如集にも、次の一首がある。

数ならぬ世を浮舟のよるべなみ響の灘の風ぐをこそ待て
これらのように「ひぢきの灘」が、忠見集などの歌から誤り伝えられて、「響の灘」と変り、播磨の名所となったものらしい。

「ひびきの灘」は玄海灘、つまり山口県にあるわけです。『名所歌枕』は正確に「播磨国」「ひぢきなだ」と記していますが、紫式部より五十年ほど前の忠見たちが「播磨なるひびきの灘」といつてゐるわけですから（忠見集の本文に後代の改編が施されていないことを前提にしての話ですが）、『源氏物語』が「ひびきの灘」と記しているのも、これは玄界灘ではなく、播磨の「ひびきの灘（正確にはひぢきの灘）」を指していると考えるべきでしょう。「海賊や大夫監が恐ろしくて胸がどきどきひびいて、名所のひびきの灘を通つたのに、全くそんな景色の良さなんてそちのけで通り過ぎてしまったわ」という状況ですね。

川尻といふ所近づきぬ、と言ふにぞ、すこし生き出づる心地する。例の、舟子ども、「唐泊より川尻おすほどは」と、うたふ声の情なきもあはれに聞こゆ。

ここでようやく、畿内に入つてきたとほつとするのです。この部分について『河海抄』にこんな注があります。

善相公意見延喜十四年曰く、重請修復播磨国魚住泊事

のです。

こうして玉鬘は長谷観音にお参りして、図らずも今は源氏の六条院に仕える右近との再会が果たされ、やがて源氏に引き取られることとなります。ずっと都で暮らしてきた右近の目には、久しぶりに上京してきた乳母たちが田舎人にみえて仕方がない。乳母たち一行は長い田舎暮らしで価値観がすっかり狂っていることを至る所で露呈します。

「あなかま、たまへ。大臣たちもしばし待て。大式の御館の上の、清水の御寺観世音寺に参りたまひし勢は、帝の行幸にやは劣れる。あなむくつけ」

玉鬘の父は内大臣、源氏は太政大臣。劣り腹の玉葛とてまかり間違つても国司風情の妻に納まるはずはないのですけれども、乳母子の三条は、太宰の大式の北の方が、九州の清水の観世音寺へお参りしたときの威勢を思い出して、「大和守でもいいし、太宰の大式でもいいし、自分が最高と思う人に玉鬘を嫁がせてあげたい」というのです。少式の娘として、乳母子たちは、大式の北の方につき従つて観世音寺へお参りしたのかもしれない。

ところで『紫式部集』に見えた女友達は、筑紫で亡くなりましたから、彼女の西国の旅は往路だけでした。しかし『土左日記』の紀貫之も後任が下ってくるのが遅いといつて怒っていますように、赴任の旅は急ぐこともないので、紫式部の幼友達はおそらくゆつくりと道中を楽しんだことでしょう。彼女がもし元気で帰ってくれば、紫式部はもともと瀬戸内の島々、海岸沿いの名所古跡、かつての神戸とか横浜のような賑わいを持った太宰府、さらにその先の大

陸に渡っていく突端の肥前長崎、そういったところの話が聞けたのではないかという気が致します。それからこの当時の地名の音や表記は、必ずしも現在のものと同じではありません。たとえば現在の厳島は『平家物語』では既に厳島とありますけれども、『名所歌枕』の安芸国の項を見ればおわかりのように、「寵嶋」と書いて「うつくしま」と読んでおります。このように現在地と突き合わせ可能な地名も結構ありますが、それがどこに該当するかわからないというものも随分ございます。そんなわけで「源氏物語の西国」は、相当補って読んでいくほかないとは思いますが、古代の旅の中では豊かなものであっただろうということをご想像頂けたらと思います。

肥前国	筑前国	長門国	周防国	安芸国	備後国	備中国	播磨国	摂津国	
松浦	唐泊 金御崎		大嶋				比治奇奈田		源氏物語とある歌枕に
	金御崎			寵嶋 (今の厳島)	鞆浦		明石 室泊 高砂	長柄 生田 三嶋江 (名所歌枕 では三嶋) 須磨 御前 鳴尾	散木奇歌集 悲嘆部とある歌枕に
	次田の湯 門司の関	室積 彦島 (ひくしま?) 赤間		式部泊 口無の泊	白石	児島	木場	和田岬 加島 江口 まて	散木奇歌集 悲嘆部のみにある歌枕

付記：本稿はもと、日本文学風土学会代表理事・中田武司先生のご企画で、学会三十五周年を記念に産経学園との提携特別講座として行なわれた「文学と風土」のうち、「西国と源氏物語」の表題で担当させていただいたものの採録である（平成八年十二月二日、於自由丘東急産経学園）。同企画は翌年ただちに、勉誠社（改め勉誠出版）で編集され、昨年刊行された（『文学と風土』）が、ちょうど締切間際に秋澤互氏の「松浦なる玉臺―その舞台設定の意義をめぐって―」（『國學院雑誌』97 平成八年十二月）の抜刷を頂戴して大変啓発され、幾分かでも成果を盛り込みたいと欲張っている間に原稿提出期限を逸してしまった。秋澤氏の論は、松浦という異境との境界性、また佐用媛と夕顔との通底等々、魅力的な問題提起に溢れている。いまだ証文の出し遅れ、しかもこれといって新しい知見もないのであるが、同人誌の端境期を言い訳に掲載することとした。筋違いな利用を快くお許し頂いた中田武司氏にお詫び旁心より感謝申し上げます。また、テープ起こしには小山香織・吉川和雅子さんを煩わせた。

付記2：このテーマでは右にあげた秋澤氏のほかに、相前後して次のような御論があり、それぞれ啓発を受けた事を付記しておく。

田中初恵氏「筑紫の歌枕―松浦を中心として―」『宮城学院女子大学学人社会科学論叢』5 1996・3。

斎藤正昭氏「朝顔の姫君と筑紫の五節登場の謎―『紫式部集』との関係から―」『いわき明星大学人文学部研究紀要』一〇 1997